



還暦の読書感想文

北区・上町支部 新牧医院 | 新牧 大彦

西研先生の著書をもとに、自らの節目と記念に寄稿させていただきました。

その本は、3冊。

著者の紹介：1957年鹿児島県生まれ

東京大学大学院総合文化研究科
修士課程修了

東京医科大学教授（哲学教室）

『現象学とは何か』 編著 西研・竹田青嗣・他

「哲学と学問を刷新する」

『しあわせの哲学』

「わたしの輪郭を一望する」

『哲学は対話する』

「プラトン・フッサールの
共通理解を作る方法」

鹿児島と縁のある西研先生の名著は、人々の前に立ちだかる閉塞感・無力感の壁が、ベルリンの壁のように崩れることを期待させます。対立する思想に、新しい認識論を読み解き、「共通理解」へと導くことを目的とした現象学との出会い。この3冊を読む順番は、『現象学とは何か』、次に『しあわせの哲学』、最後に『哲学は対話する』をお勧めしたいです。

1冊目の『現象学とは何か』

現在、フッサール研究者の先頭に立っておられる竹田青嗣先生と西研先生の編著です。竹田先生が執筆された『欲望論』も哲学の系譜に一石を投じた秀作で、読みごたえのある論考です。ぜひ、現象学への興味を持たれた方には読んでいただきたい書籍の一つです。

『現象学とは何か』は竹田先生の総論的な

解説に続き、西先生の「本質観取をどのように行うのか」の章で、本質観取から共通理解を得る方法を知り、ワークショップへの活用までが語られます。その後に各分野で活躍中の6名の先生方の論考が続きます。その中に【医療・医学と現象学】「正しい判断の不可能性を超越する」と題した論考が行岡哲男先生より医療現場で現象学的な発想が役立つことが紹介されます。現象学の入門的1冊です。

次に『しあわせの哲学』は、有名な思想家ら、ルソー・バタイユ・ハイデガー・ヘーゲル・ニーチェらの思想を紐解きながら、しあわせの条件を探る内容です。

ルソーは言う、不幸せとは「欲望と能力の不均衡」である。「したい」という欲を満たすには、「できる」という能力と資源があって可能となると語り、能力や資源がないと、その不均衡により不満を感じたり、嫉妬を生じるという。

バタイユは、「いま・ここ」の享樂も不安からの解放として肯定する。お祭りやライブでの発散は人の持つ本質的な孤独を和らげるという。

ハイデガーは、「死」の代理不可能性・没交渉性・確実性・時期の無規定性を指摘し、しあわせを求めるには、覚悟を持って生きることが求められるという。

フッサールは、人間には「承認」と「自由」という根源的な想いが現れてくるという、この自由と承認の両立がしあわせの条件になると考える。

西先生はフッサールの考えを基に、自由を

探索・創造・成長と定義し、承認を愛情承認・評価的承認（競争と役割）・存在承認の三つに分けて解釈を加えていきます。

自由と承認は、矛盾する関係でもあり、その両立・調和がしあわせの条件となること。

『愛情』承認は、主に幼少期に形成される基本信頼感の獲得のこと。『評価的』承認には、「競争」と「役割」があり、前者は成績による評価、後者は社会活動で役割を果たすことへの評価とされます。競争承認は学歴やショーレース・スポーツの好成績などのことになると思います。『存在』承認とは、言葉を通して、相手の「想い」を受け取り、存在を認め、尊重すること。このように定義して、自由と承認の調和をどのようにして両立できるのかを論じていきます。そして、ヘーゲルの「事そのもの」…『誰もが認めるはずの価値あること』とは何かを考えると、ニーチェの「ルサンチマン」…『無力感を復讐心で紛らわそうとすること』と「永遠回帰」…『人生全体を肯定できるメッセージと解釈』し、ルサンチマンに陥ることのないように、また、「事そのもの」に沿った自分の行動の軸を持つこと、軸を持つことで本当の自由を手にして、人は元気となり強くなる。もう一つには、他者との繋がりを育み、想いを受け止め合う対話を通して、互いの存在を認め、それを土台として自分の「生の可能性」を見出すこと、また、選ぶことのできない生の条件を呪うことなく、自分の今生きている条件の中で「自分は何ができるのか、何をしたいのか」と自問し、自分の物語を再構築していくことでしあわせの条件が整うのではないかと論じておられます。

3冊目 『哲学は対話する』

1. 哲学と共通了解 「この本で私が示したいのは、次のことだ。」と始まります。

①哲学は「根源的真理を問うもの」ではなく、「根源的真理をめざす悪しき哲学（形而上

学）を解体しようとするもの」でもない。哲学の最大の課題は、ものごとの「よさ」（なぜよいのか・どういう点でよいのか）を問うことにある。（哲学の課題）

②そうすることで、ひとりひとりの生き方と、社会のあり方とを「よりよき」ものにしようと配慮することが、哲学の目的である。（哲学の目的）

③哲学は、人それぞれの答えの出ないものではない。適切な問い方をすることで、人々が納得しうる答え（共通了解）をつくっていくことが可能である。（哲学の方法）

今、世界に不穏な空気が漂っています。未来への不安、解決困難な国家・宗教・政治・個人への対立と空転する事態の常態化、機能不全に陥っている仲介するはずの組織、個人では解決の糸口さえ見つけられるはずもなく、無気力や失望の中にいる人がほとんどではないでしょうか。この袋小路から抜け出す考え方はないのでしょうか。

そこで、難解であるものの、フッサールの現象学から問主観性・現象学的還元・本質観取・現象学的言語ゲームと反省的エヴィデンスと言われる哲学の方法を用いることで、独断論と相対主義の争いや戦争、それを止めるように働きかけても、無力で空転状況が続く現状、それらを打開できる方向へ導くことができると感じています。

容易ではないことは、分かっています。しかし、今のままでは、あまりにも希望がないと思いませんか。人類にとって世界的に最悪で困難な事態を変えられる方法があることを信じてみたいです。

医療現場へ目を向ければ、『死』の問題があります。自己の死を認知できる人間は存在しません。死の体験を語ることは誰にもできません。我々は医療者として、死生観を語る

こと・終活への相談を受けること・予後の告知などで死と向き合う場面に遭遇します。現象学的還元という手法を用いることで「死」自体ではなく、問いの形を「死後の世界が気になってしまうのはなぜか」と変えることで、問いそのものの体験世界における意味を言語として取り出し、対話し、本質に近づけていき、共通理解を導く試みは可能であると言われる。

そのほか、ワークショップで『正義』『勇気』『嫉妬』『自由』『教育』『幸福』などを題材に共通理解を導く試みが行われています。

本書の締め「おわりに」とあり、哲学の課題と目的が示されます。

「哲学の課題」

- ①ある事柄について、「なぜよいのか・どういう点でよいのか」を問うこと（よさの内実の問い）
- ②その「よさ」が発揮されるために必要な条件を問うこと（実現の条件の問い）

「哲学の目的」

- ①人間的欲望（人は「何を」求めて生きるのか、その実現の条件の考察）
- ②社会における「よりよき共存」

テーマは、この2つに集約されるであろうと論じられ、医療を実践する中でも重要な指摘と考えます。

私が書物に惹かれ、心震わす言葉に出会う時、その中には、「死生観」や「幸福論」が含まれることが多いです。答えのない問題にぶつかり、負の力に耐える能力（ネガティブ・ケイパビリティ：言葉の由来は詩人キーツ）が弱った時、まず、肉体を動かすようにしています。具体的には、心身の軸を確認しながら、空手道形をゆっくり、じっくり演武します。これが現象学のエポケーに繋がる感じがするからです。その後、言語的思考を始めます。西先生の書籍との出会いもそのような時

でした。

「共通理解」は、人と人との良好な関係性を育み、よりよき共存に大切です。それだけではなく、これは私が想うことですが、ひとりひとりの健康を考える場合にも、言語・認知の臓器「脳」と「脳以外」非言語臓器の関係性を共通理解で考えるのはどうだろうかと思ったりします。

言葉を持たない臓器が神経を介して脳へ伝達し、内臓体験を受け取り、一般には体調と言われるものを脳が統合している。脳が欲する『食べたい』『飲みたい』『面倒くさい』を、非言語臓器は、『もうやめて』『私たちはもう十分』『適度に動かしてね』と危険を発しているかもしれない。脳の勝手な解釈ではなく、五臓六腑と骨格を支える骨・筋肉・皮膚を思いやり、非言語臓器との共通理解を心掛けると、ひとつの心身として well-being を保ちやすいのではないのでしょうか。

さて、フッサールがたどり着いたこれまでの哲学の歴史になかった独創的な考えとは何か？その独創的な考えは、長い間その解釈に誤解が生じていたとか、フッサール自体に説明が足りない部分もあっただろうと西先生は、おっしゃっています。

端的には、『客観的世界の主観からの独立性を、主観的体験のなかで成立する「確信」として捉えようとしたこと（超越論的還元といわれる）・まず、この独立性を自身の知覚体験の調和にもとづくものとして捉えたこと・さらに、この独立性を、問主観性にもとづくものとして捉えたこと』と説明されます。

この説明を理解することは簡単ではありません。私に理解できるのは、人間の認識にコペルニクス的転回のような独創的な発想があり、その考え方を哲学的な検証・思考実験により、これまでになかった確度で人間の認識を解き明かしているということです。それにより、「単なる客観的な対象の認識」と「自分の体験を認識の対象として、そのあり方を

確かめること」との違いを見つけ出しました。前者は、後続する体験によって常に書き換えられる可能性があるのに対して、後者は、デカルトが言った「われ思う、ゆえにわれあり」つまり、自分の体験へ向けた認識には不可疑性（反省的エヴィデンス）があると気づき、仮に世界が仮象であり、存在しないかもしれないと疑ったとしても、疑うということ自身が「われ」の存在を証してしまうということ、この反省的エヴィデンスの確証をもとに、さらに私個人だけでなく、「自我一般」に当てはまるだろう一般構図を私から取り出せるなら、個々の体験を他者と共有でき、公共的な議論への通路となり得ます。それを本質観取・本質記述として対話することが可能となり（現象学的言語ゲーム）、妥当性の確証の構図があると言えることとなります。この大事な部分の説明をフッサールが十分にしなかったことが、現象学の普及が進まなかった理由と西先生は考えていらっしゃる。

その上で、認識という態度は、認識する前にすでに客観的世界が存在しており、それを認識し、欲を満たす行動を起こすという順番ではなく、欲望とそれを原動力とする観点が先にあり、それを叶えるために認識がはじまるのだと断じておられます。「真なる事態の写し取り」が認識ではないと。「リンゴが見えたから、食べたい」と思うのではなく、「食べたいという欲求があり、リンゴを食べ物として認識する」認識が欲望（必要・関心）に相関してのみ成り立つと言うのです。しかも、欲望が生じて、即時に充足された場合には世界の秩序は存在しない、即時に充足されない時に初めて、「世界秩序」が始まり、時間も生まれると言います。そして、私たち人間の世界は、欲望が言葉と用途によって分節していく。そのような世界がずっと続いている。

また、フッサールは、他我と共有世界の意味の成立根拠を「他我の意味が全く存在しない世界」という思考実験を通じて、間主観性・

自我の二重性の確信を見つけていました。この奇抜な発想と思考実験から、自我・他我の意味を構成する成り立ちや共有世界の意味を日々更新する体験と反省を通して、「自分も他我たちも同じ世界に生きている」という確信を持つことができ、「意識体験の場としての私と他者たちの中のひとりとしての私」という二重性を持つことになると言います。この認識が人間社会の「よりよき共存」を支える可能性を持っています。

医療において、認知症患者の増加が問題となっています。この認識論から認知症を紐解くならば、「思い出して確かめる能力」が失われる事態は次のようになります。

私たちは普通、「現実には、それ自体として法則があり時間空間的な秩序がある」と信じています。そして、その秩序の一部を、自分はそのまま知覚し受容していると思っています。しかし実は、私たちは常に自身の体験を時間的・空間的に整序し、必要な時にいつでもこの時間的・空間的な脈絡に立ち戻れることによって「客観的世界・現実」の秩序を自分の中に存立させている。認識とは、必要に基づいて世界を確かめる行為であり、また、私たちは、普通意識せずとも、絶えず世界秩序を自分の中に構築・再構築していることが分かっています。認知症となり、「私がどういう経緯で、ここにいるのか」を理解できなくなり、つまり、現在知覚していることを、時間的な秩序に位置づけることができなければ、混乱し不安になり、生活していくことが極めて困難になることが容易に想像できます。

西先生の言葉に『生の吟味と魂の世話』というフレーズがあります。この言葉が私は好きです。「ひとりひとりのしあわせ」と「よりよき共存」という意味に聞こえます。

難解と言われる現象学という哲学を西先生らを通して知り、書籍の記述をお借りしながら、私なりの理解と解釈、そして、新たな考

え方や実践方法などを学ぶことができました。簡単ではないものの、熟読し、何度か繰り返すことで、愉しむことができます。

そして、その度に『無知の知』を実感します。時代は、認知能力と非認知能力、また、テクニカルスキルとノンテクニカルスキルとの両方を併せ持つ人材育成へと進んでいくようです。少しでも、まじな人間でいるために、葬列の内外にいる偉人の肩を借りて、ものを見るように努めなければいけないなあと思っではいるものの、実が伴いません。しかし、単純に「知らなかったことが腑に落ちる時」

には嬉しくなります。哲学という言葉は、フィロソフィからきており、フィロソフィとは、「知を愛すること」という意味だそうですから、人間の本質的な喜びなのかもしれません。

最後に、私が哲学書に引き込まれた切っ掛けは、東洋の哲学者である井筒俊彦先生の著書『意識と本質』・『読むと書く』に出会ったからです。それから、「読むと書く」を細々と実践してきました。これからも読んで書く毎に少しだけまじな自分でいられるよう続けたいです。

